

大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討

—— 本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して ——

伊 藤 正 哉* 小 玉 正 博**

本研究では, 大学生の主体的な自己形成として自律性, 可能性追求意識, 現状改善意識を取り上げ, これらに影響する内的要因として本来感, 自己価値の随伴性, 自尊感情を検討した。以上の変数を測定する尺度を含んだ質問紙が大学生男女 220 名に実施された。邦訳された自己価値の随伴性尺度についての尺度分析の結果, その信頼性と妥当性が確認された。多変量重回帰モデルを検討した結果, 本来感は自律性, 可能性追求意識, 現状改善意識に正の影響を与えており, 自己価値の随伴性は自律性には負の影響を与えている一方で, 現状改善意識には正の影響を与えていた。また, 自尊感情は自己形成に影響を与えてはいなかった。以上の結果から, 大学生の主体的な自己形成の理解において, 単なる自尊感情の高低に注目する視点を精緻化させ, 本来感と自己価値の随伴性を考慮する有用性が考察された。

キーワード: 主体的な自己形成, 本来感, 自己価値の随伴性, 随伴性自尊感情, 大学生

問題と目的

成人化期 (emerging adulthood, Arnett, 2000) にある大学生時代は, 受験勉強という社会的圧力から解放され, 一定の職を得て独自の生計を営む社会人になるまでの準備期間である (村田, 2002)。この期間, 大学生は自身の生き様を模索し, 特定の活動に没頭したり様々な経験を積み重ねたりすることで, 自分という存在を形作っていく (田中, 1995)。この過程は, その人がその人自身によって他でもないその人となる, という意味合いが特徴的である (滝沢, 1994) ため, 単なる発達や人格形成というよりも, 自己成長や自己形成という言葉で取り上げられ, そうした個人の主体性を重んじる研究者によって検討されてきた (e.g. Bauer & McAdams, 2004; 水間, 2002; Sheldon, Kasser, Smith, & Share, 2002)。自己形成は学校教育の本質的な目標とも考えられ (梶田, 1984), この過程についての理解が求められている。

自己形成についての論述や研究を概観すると, 自己形成の過程に不可欠と考えられる側面として, 自己形成意識と自律性が挙げられる (黒崎, 1995)。自己形成意識とは, 自分自身によって, 自分自身を成長させ, 形

作っていかうとする意欲の強さを意味する。他方, 自律性とは, 日常の些末な問題から人生の進路に関わる重要な問題まで, 自分の判断により自分の責任で選択することを意味する。すなわち, 自己形成意識は自己形成過程を押し進める動機づけ的な側面として, 自律性はその方向づけに関わる側面として捉えられる。

では, そのような自己形成を促進させる要因とは何であろうか。様々な環境的・個人内的な要因が考えられる (星野, 1975; 梶田, 1984; 水間, 2002) が, その中でも古くから心理学において重要視されてきた要因に自尊感情が挙げられる (梶田, 1994; 福島, 1975)。自分に自信 (自尊感情) を持つことによって, 色々な決断が可能となるだろうし, また, 新しいことにも挑戦することが出来るだろうとの考えからである。実際, 世界保健機構が提唱したライフスキルプログラム (川畑・高石・西岡・石川・JKYB 研究会, 1997) や自尊感情促進を目的とした米国の公的な取り組み (Mecca, Smelser, & Vasconcellos, 1989) には, 自尊感情の育成によって人間が自律的に判断し健全に成長できるようになるとの基本的考えがあり, これに基づいた実践が展開されている。

しかしその一方で, 自尊感情が自己形成を促進させるどころか, 個人の適応に対してほとんど影響を与えず, 逆に社会適応を阻害する可能性すらあるとの見解がある (Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003; Crocker & Park, 2004)。これを支持する代表的な知見としては, 高い自尊感情の不適応的な様相を示したいくつかの実証的な研究 (e.g. Baumeister, Heatherton, & Tice, 1993) が挙げられる。また最近では, 教育実践について

* 筑波大学人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻発達臨床心理学分野

〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1
masayait@human.tsukuba.ac.jp

** 筑波大学人間総合科学研究科 (心理学系)
〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1
mkodama@human.tsukuba.ac.jp

の哲学的な論考においても、自尊感情の育成に関して慎重的な見解がみられる (Cigman, 2004)。

そのような中で、自己形成の一側面である自律性に影響する要因として、自尊感情と併せて本来感の検討を行った伊藤・小玉 (2005) は興味深い結果を示している。本来感 (Sense of Authenticity) とは、個人が自分らしくあると全般的に感じている程度を指す。本来感は古くから心理臨床の実践において重要視されてきた概念であり、近年では人間の well-being や自尊感情の内実を考慮する上で重要な概念として再認識されつつある (Harter, 2002 ; 伊藤・小玉, 2005 ; Kernis, 2003a, 2003b)。

その伊藤・小玉 (2005) の結果では、自尊感情と自律性との間に見られる正の相関関係は表面的なものであり、自尊感情と共変動する本来感の影響を統制すると、自尊感情が自律性に負の影響を与えることが示されている。この結果は、自尊感情が自己形成を促進するという考えと、それに反する見解を統合する結果として解釈できる。すなわち、自尊感情は自律性と正の単相関関係にあり、その点では確かに自己形成に促進的な影響を与えているように見える。しかし、促進的な影響を与えているのは自尊感情と共変動している本来感の影響によるものであり、自尊感情それ自体が自律性を促進しているわけではなく、むしろ、本来感の影響を統制すれば自律性を阻害させる可能性さえ考えられる。

ここで問題となるのは、前述したような自尊感情についての相反する見解のどちらが正しいかということではなく、本来感を統制した場合に限り自尊感情が自律性を低下させるという点である。そして、これは自尊感情の概念化と深く関わった問題と思われる。では、本来感を統制した場合の自尊感情とはどのような自尊感情なのであろうか。自尊感情に様々な下位様態を仮定する考え・理論がいくつか提示されている (e.g. Baumeister et al., 2003 ; Cigman, 2004 ; Crocker & Park, 2004 ; 梶田, 1984 ; Kernis, 2003b) が、以上の点を解釈するに当たって、Deci & Ryan (1995), Ryan & Deci (2004) の考えが最も有効であると思われる。

Deci & Ryan (1995), Ryan & Deci (2004) は、自己決定理論 (Ryan & Deci, 2000) に従い、自尊感情を随伴性自尊感情 (Contingent self-esteem) と本当の自尊感情 (True self-esteem) とに区別している。随伴性自尊感情は、自己価値の感覚が何らかの外的な基準上での査定に依存しており、その基準上で高いパフォーマンスを達成すること (e.g. テストで 100 点をとる) で得られる自尊感情と定義される。一方、本当の自尊感情とは、自己

価値の感覚に何の外的根拠も必要とせず、ただ自分らしくいるだけで感じられる自尊感情と定義される。そして、随伴性自尊感情は自律的な自己の統合を阻害する一方で、本当の自尊感情は社会的価値観を自己の内に取り入れ、内在化し、自律的に統合させることに寄与するとされている。

概念として、本来感はあるべき自尊感情と極めて近い¹。それゆえ、伊藤・小玉 (2005) における本来感を統制した自尊感情が意味する自尊感情とは、本当の自尊感情の成分を排除した自尊感情、すなわち随伴性自尊感情の成分を強く反映したものであると推測できる。随伴性自尊感情が高ければ、自尊感情を確保するため、外的基準上での達成行動に縛られることとなり、その為自己自身による決定 (自律性) が難しくなると考えられる。またその一方で、本来感を高く感じていれば、外的な基準上での判断に縛られないことから、自身の意向に基づいた自由な自律的判断が可能となると考えられる²。

このように、本来感、ならびに随伴性自尊感情という概念を導入することによって、自尊感情の自己形成に対する影響についての相反する見解を統合する可能性を持ったものとして伊藤・小玉 (2005) の結果が理論的に解釈されうる。そして、このような考えは、自己形成のもう一つの側面である自己形成意識に対しても重要な含意を持っている。本来感を高く感じていれば、現在の自分自身の欠点を自我脅威として受け取ることなく現状の改善意識が高まるであろうし、安心して新しい局面で自分を活かすように前進できる (Hodgins & Kee, 2002 ; Kernis, 2003a, 2003b) と考えられるため、本来感自己形成意識を促進させるだろうと予想される。その反対に、自尊感情が外的な基準に随伴しているこ

¹ 本来感とは自分らしくある感覚を指すが、本当の自尊感情は自分らしくあることによって、自然と湧き起こる自己価値の感覚であり、厳密には区別される概念である。なお、Deci & Ryan (1995), Ryan & Deci (2004) は理論的に本当の自尊感情という概念を仮定しているに留まり、これを操作化してはいない。

² 本当の自尊感情と随伴性自尊感情との区別は、古くは自尊感情を社会的基準上でのすごくいい (very good) という感情と、個人的基準上でのこれでいい (good enough) という感情とに分ける見解 (Rosenberg, 1965) に端を発すると思われる。伊藤・小玉 (2005) では自尊感情を測定する尺度として Rosenberg (1965) の邦訳版が用いられている。この尺度は自尊感情のこれでいいという側面の測定を意図され作成されたが、実際には社会基準上でのすごくいいという感覚も弁別できずに測定しているとの見解 (Kernis, 2003b) や知見 (溝上, 1998) があり、本論文はこの理論的立場を前提としている。

とで、随伴している領域に囚われ、それ以外の新たな活動や視点に価値を見出しにくくなると考えられる。また、自尊感情を獲得するために、随伴している対象内での達成のために努力が払われるとしても、自尊感情獲得に動機づけられているそうした状態では、自身の欠点を直視し自分自身を全体として向上させていこうとする意欲にはつながりにくいと考えられる(Crocker & Park, 2004)。

以上のように、主体的な自己形成に対して本来感³は正の影響を、随伴性自尊感情は負の影響を与えると予測される。本来感や随伴性自尊感情という構成概念は比較的最近になって操作的に取り上げられるようになったものである(Kernis, 2003b)。これまで、以上のような予測を検討した実証的検討は国内外の両方で見られない。そこで、本研究では以上の予測を仮説として検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

茨城県の国立大学の学生 220 名(男性 122 名, 女性 98 名, 平均年齢 20.06±1.28 歳)を調査対象者とした。

調査時期および手続き

2004 年 11 月に、無記名の個別記入形式の質問紙で、大学の教育学についての概論の授業時間中に約 15 分かけて実施した。

調査内容³

以下に示す調査内容を含む質問紙を作成した。表紙には、大学生が自分に対してどのように感じているのかを探る調査である旨を記載した。

1. 本来感 個人が自分らしくあると感じている全般的な感覚を測定する伊藤・小玉(2005)の本来感尺度を用いた。本来感を感じている個人の状態を記述した 7 項目に対して、5 件法(1.あてはまらない 2.あまりあてはまらない 3.どちらでもない 4.まあまああてはまる 5.あてはまる)で評定を求めた。代表的な項目としては、「いつも自分らしくいられる」、「これが自分だ、と言えるものがある」、「人前でもありのままの自分が出せる」などである。

2. 自己価値の随伴性 Paradise & Kernis (1999)の Contingent Self-Esteem Scale を作者らの許可を得て、林・鈴木(1986)を参考に以下の手順で邦訳した。第 1 に、論文の第 1 著者が Contingent Self-Esteem Scale を日本語に翻訳した。第 2 に、心理学を

専門とする大学院生 1 名が翻訳された項目の表現の適切さや文意の明瞭さを点検し、表面的妥当性を検討した。第 3 に、心理学を専門とする英語の堪能な大学院生が、日本語に翻訳された項目を英語に再翻訳した。第 4 に、米国マサチューセッツ州のクリニカル・サイコロジストの資格を持つ心理学の大学教員が、英語に再翻訳された項目について、表現の適切さを点検した。第 5 に、尺度の作者(M. H. Kernis)が原項目と再翻訳された項目とを照合し、文意の乖離がないかを点検した。最後に、第 5 の点検を受けて表現を修正し、日本版の自己価値の随伴性尺度が設定された。この尺度は、個人の自尊感情がどの程度、外的な達成や期待に随伴しているのかを測定する(Kernis, 2003b; Neighbors, Larimer, Geisner, & Knee, 2004; Patrick, Neighbors, & Knee, 2004)⁴。全 15 項目からなり、本来感尺度と同じ選択肢の 5 件法である。

3. Rosenberg の自尊感情 山本・松井・山成(1982)で邦訳された Rosenberg (1965)の自尊感情尺度を用いた。この尺度は、自分に対してこれでよい(good enough)と感じるような自分自身に対する肯定的感情の程度を測定するとされている。10 項目からなり、5 件法で評定を求めた。ただし、伊藤・小玉(2005)と同様に、因子への負荷が極端に低い項目番号 8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除いた計 9 項目の合計得点を自尊感情得点とした。

4. 自律性 伊藤・小玉(2005)と同様に、Ryff (1989)の Psychological Well-being Scale を基にして作成された心理的 well-being 尺度(西田, 2000)に含まれる自律性尺度を用いた。8 項目からなり、6 件法で評定を求めた。ただし、伊藤・小玉(2005)では因子への負荷量が高い 3 項目のみが使用されており、この結果と比較するため、分析においては同様の 3 項目を加算した合計得点を自律性得点として使用した。その 3 項目とは、「自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい」、「自分の考え方は、そのときの状況や他の人の意見によって、左右されがちである」、「重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る」である⁵。

5. 自己形成意識 自己形成意識を測定する尺度と

⁴ 英語版の原尺度名は Contingent Self-Esteem Scale であるが、自尊感情と自己価値(感)には若干のニュアンスの違いがあるものの、同義の概念として扱われていること(Crocker & Neur, 2003; Kernis, 2003a, 2003b)、ならびに本研究では自尊感情も変数として取り上げており表現の混乱を招くことから、以後、この尺度で測定されている構成概念を自己価値の随伴性と呼ぶこととする。

⁵ いずれも逆転項目である。

³ 他の視点による研究のための質問項目が質問紙に含まれていたが、本研究では扱わないため、その記述は省略する。

して、小平 (2002) の尺度を用いた。5 件法の評定肢で、2 つの下位尺度から構成され、それぞれ 6 項目である。下位尺度は、自分が持っている様々な可能性を追求し、それを見出していこうとする可能性追求意識と、現状の自分の悪いところを改善し、より適切な存在となるために努力しようとする現状改善意識である⁶。可能性追求意識の代表的な項目は「新しいことやちがうことをいろいろしてみたい」、「自分の可能性を追求していきたい」であり、現状改善意識の代表的な項目は「自分の悪いところをちゃんと直していきたい」「今できることをしっかりやれるようになりたい」である。この尺度の基になっている水間 (1998) においては、得点の分布が高い方向に歪んでいたため、本研究では正規分布になるよう、評定肢を (1. あまりあてはまらない 2. 少しだけあてはまる 3. まあまああてはまる 4. かなりあてはまる 5. 非常によくあてはまる) とした。

6. 自己価値の随伴性尺度の妥当性指標 自己価値の随伴性尺度の構成概念妥当性を検討する指標として、自己像の不安定性 (Rosenberg, 1965) と、公的自己意識 (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975) を取り上げた。自己像の不安定性とは、日常生活の中で、個人の自己感覚がどの程度、状況的に変動するのかを意味する。もし、個人の自尊感情が外的に随伴しているならば、外的な評価的イベントによって、自己像は大きく変動するものと考えられる。また、外的な達成に見合っているかどうかを査定するには、他者との相対的位置づけや他者からの評価についての認識が必要となる。それゆえ、自己価値の随伴性が高ければ、その査定のために高い公的自己意識が伴うと考えられる。以上から、自己像の不安定性および公的自己意識と自己価値の随伴性尺度とは正の相関関係が予想される。自己の不安定性は「私は自分自身に対する考えが、とても変わりやすい」や「自分自身をととても良く評価する日もあれば、とても悪く評価する日もある」といった 5 項目からなり、5 件法である (小塩, 2001)。公的自己意識は「自分のふるまいが場違いでないかと気になることがある」や「自分が人にどう見えるかが気になる」といった 5 項目であり 5 件法である (外山・桜井, 1999)。

以上に挙げた尺度は全て各項目を単純に加算した合計得点を、その構成概念における程度を表すものとして操作的に定義した。

⁶ 小平 (2002) においては、それぞれ拡大的意識、充足的意識と命名されているが、表現の明瞭さを考慮して、本研究では以上のように言い換えた。

結果と考察

自己価値の随伴性尺度についての尺度分析

自己価値の随伴性尺度の構造と信頼性 自己価値の随伴性尺度 15 項目それぞれの分布状況を確認したところ、歪みは見られなかった。そこで、Paradise & Kernis (1999) の原尺度と同様の構造がみられるのかを検討するため、原尺度が構成された手順 (Kernis, 2003b; Neighbors et al., 2004; Patrick et al., 2004) にならって、全 15 項目について主成分分析を施した。その結果、固有値を見ると第 1 主成分 (4.14) と第 2 主成分 (2.41) との間に最も大きな減衰が見られ、全ての項目が第 1 主成分に .30 以上で負荷していたことから、1 主成分構造での使用に耐えられると判断された。この結果から、先行研究 (Kernis, 2003b; Neighbors et al., 2004; Patrick et al., 2004) と同様に、本研究ではこの尺度を一次元構造の尺度として用いることとした。主成分分析の結果と各項目ならびに合計得点の記述統計量を TABLE 1 に示す。さらに、Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .80$ であり、十分な内的整合性を備えていることが示唆された。

自己価値の随伴性尺度の構成概念妥当性 自己価値の随伴性と自己像の不安定性、ならびに公的自己意識との相関関係を検討した。その結果、自己価値の随伴性は、自己像の不安定性とは $r = .24 (p < .01)$ 、公的自己意識とは $r = .54 (p < .01)$ で有意な正の相関関係が見られた。自己像の不安定性とは弱い相関関係であったが、自己像が自尊感情に随伴したイベントのみによって変動するわけではなく、何の要因もなく自然と自己像が変動すること (ジェームス, 1992) や、自己評価的なイベントでの達成が一定である場合 (e.g. 常にテストで好成績である) には自己像は変動しないことから、低い相関関係は妥当な結果であると思われる。また、公的自己意識とは中程度の相関関係が見られた。自尊感情が何らかの外的基準に随伴しているならば、その基準上での達成や他者からの評価を慢性的に査定しなければならない (Deci & Ryan, 1995)。しかし、それ以外の要因 (e.g. シャイネス特性) によっても公的自己意識は高まることから考えられるため、自己価値の随伴性と公的自己意識との中程度の相関関係は妥当な結果であると思われる。以上から、自己価値の随伴性尺度についての構成概念的な妥当性が基本的な点では確認されたと判断され、以後の分析では全 15 項目を単純に足し挙げた得点を自己価値の随伴性の程度を表す指標として用いた。

TABLE 1 自己価値の随伴性尺度の主成分分析結果と記述統計^{a)}

	負荷量	平均値(SD)
4 自分のことが好きかどうかは、他人からどれだけ好かれ、受け入れられているのかにとても影響を受ける	.78	3.32(1.09)
7 自分のことが好きかどうかは、他人が自分のことをどう言ったりどう思ったりするのかにとても影響を受ける	.71	3.24(1.07)
8 他人から自分の外見を誉められると、自分自身をとて価値ある存在だと強く感じる	.67	2.95(1.14)
6 自分の価値を測る重要なものさしは、自分の外見がどれだけ魅力的であるかということにある	.62	2.60(1.03)
14 自分のことが好きかどうかは、自分がどれだけ魅力的に見えるのかによってかなり影響される	.61	3.09(1.01)
9 他人からひどく扱われたとしても、自分の自己価値の感覚は基本的に影響を受けることはない*	.54	3.40(1.04)
10 自分の価値を測る重要なものさしは、他人から定められた基準でどれだけ物事を達成できるかということにある	.53	2.58(0.96)
5 人と仲良くすることが、自分自身をより良い価値ある存在であると感じることに重要だ	.47	3.44(0.96)
13 自分の外見が最高に魅力的だとは思えないような日であっても、自分の自己価値の感覚が強く落ち込んでしまうことはない*	.42	3.10(0.97)
2 たとえ失敗に直面しても、自分の自己価値の感覚が揺らいでしまうことはない*	.42	3.13(0.97)
15 他者から拒絶されるような目にあっても、自分の自己価値の感覚は影響を受けることはない*	.41	3.66(1.01)
3 自分で決めた自分の中にある基準でどれだけ物事を達成できたかによって、自分をどれだけ好きでいられるのかが決まる	.37	3.24(0.93)
12 自分のしている活動が自分の理想を満たしていないようなとき、自分自身に強い不満を感じる	.37	3.90(0.89)
11 誰かが自分に好意を抱いていることを知ったとしても、そのことが自分自身に対する感情に影響することはない*	.35	3.59(0.93)
1 自分の価値を測る重要なものさしは、自分がどれだけ物事を有能に成し遂げるかということにある	.32	3.08(1.04)
二乗和(固有値)		4.14
寄与率		27.58
		合計=48.33(7.76)

a) *のついている項目は逆転項目であり得点を反転してある。

本来感・自己価値の随伴性・自尊感情が自己形成に与える影響

本来感、自己価値の随伴性、自尊感情の概念的的位置づけの確認 本来感、自己価値の随伴性、自尊感情が自己形成に与える影響を検討する前段階として、以後の分析にて取り扱う全ての変数について記述統計とCronbachの信頼性係数を算出し、さらに変数間の単相関関係を検討した(TABLE 2)。

説明変数間の相関関係を見ると、本来感と自尊感情との間にはやや強い正の相関関係($r=.64, p<.01$)があり、伊藤・小玉(2005)と同様の結果であった。自己価値の随伴性は、本来感($r=-.35; p<.01$)と自尊感情($r=-.25, p<.01$)の両方と弱い負の相関関係にあった。本来感と自己価値の随伴性は対置される逆の方向性を持つ概念であり(Deci & Ryan, 1995; Kernis, 2003b)、負の相関関係にあることは妥当な結果と思われる。同様に、自尊感情と自己価値の随伴性の間の負の相関関係も、それが自尊感情の中の本当の自尊感情の成分(ここでは本来感の成分)による影響であると考えれば(Deci & Ryan,

1995; Kernis, 2003b)、妥当な結果と言える。実際、追加分析として偏相関分析を行うと、本来感を制御した場合の自尊感情と自己価値の随伴性には有意な相関関係がみられず($r=-.03, n.s.$)、自尊感情を制御した場合の本来感と自己価値の随伴性には有意な負の相関関係が見られる($r=-.26, p<.01$)。以上から、説明変数間には、理論的な予測と整合する関連性が見られ、説明変数を設定する裏付けが得られた。

自己形成を構成する変数の概念的的位置づけの確認

主体的な自己形成を行っている程度を捉える基準変数として、本研究では自律性、可能性追求意識、現状改善意識を取り上げた。それら基準変数間の相関関係を見ると(TABLE 2)、自律性と可能性追求意識とは有意傾向で正の相関関係($r=.13, p<.10$)が見られたが、非常に低い値であった。また、自律性と現状改善意識とは有意な相関関係が見られなかった。水間(1998)や山田(2004)が、様々な自己の可能性を追求しようとする自己形成意識と、それを実質的な行動に移していく意識とは異なるものであると考察しているように、可能

TABLE 2 各変数の記述統計とそれらの単相関関係^{a) b)}

	自尊感情	自己価値の随伴性	自律性	可能性追求意識	現状改善意識	平均値(SD)	α 係数
本来感	.64**	-.35**	.45**	.29**	.21**	3.15(0.75)	.86
自尊感情		-.25**	.32**	.26**	.08	3.29(0.73)	.87
自己価値の随伴性			-.46**	-.07	.08	3.22(0.52)	.80
自律性				.13 [†]	-.01	3.59(0.90)	.78
可能性追求意識					.46**	3.91(0.88)	.95
現状改善意識						3.45(0.58)	.87

a) **: $p<.01$, [†]: $p<.10$

b) 平均値と標準偏差は1項目あたりの値に換算してある。

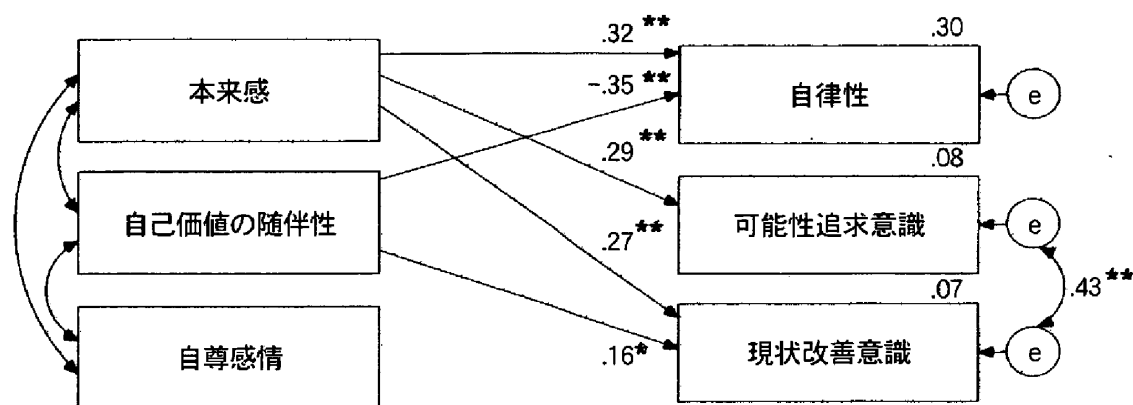
性追求意識や現状改善意識のような前向きな態度と、実際に自分自身で物事を決定できる自律性とは区別されるものであることが示唆される。また、可能性追求意識と現状改善意識との間には中程度の相関関係 ($r = .46, p < .01$) が見られた。前者が未来へ向けた意識であり、後者が現実に基づく意識であるという特徴があるものの、両者は共に自己を形成していこうとする意識として設定されていることから、中程度の相関関係は妥当なものと考えられる。以上から、基準変数の設定においても、その裏付けが得られた。

本来感、自己価値の随伴性、自尊感情が主体的な自己形成に及ぼす影響 本研究の仮説を検討するため、本来感、自己価値の随伴性、自尊感情のそれぞれの合計得点を観測変数として説明変数を設定し、自律性、可能性追求意識、現状改善意識のそれぞれの合計得点を観測変数として基準変数を設定し、この多変量重回帰モデルを構造方程式モデルにより検討した。なお、理論的に可能性追求意識と現状改善意識は共に自己形成意識の下位要素として設定されており、先の相関分析においても両者の間に中程度の相関関係が見られたことから、これを考慮して可能性追求意識と現状改善意識の誤差間に共分散を仮定した。このモデルの分析において有意水準 5% で偏回帰係数が有意でなかったパスを全て同時に削除したところ、FIGURE 1 に示された結果が得られ、これを最終モデルとした。各説明変数の標準偏回帰係数とモデルの適合度を FIGURE 1 に示した。FIGURE 1 にあるようにモデルの適合度は十分であった。標準偏回帰係数を見ると、本来感は自律性、可能性追求意識、現状改善意識に対して全て有意な正の影響を与えていた。自己価値の随伴性は、自律性に

対しては有意な負の影響を与えており、可能性追求意識には有意な影響は与えておらず、現状改善意識には有意な正の影響を与えていた。また、自尊感情は自律性、可能性追求意識、現状改善意識という全ての主体的な自己形成に対して有意な影響を与えてはいなかった。

本来感とは主体的な自己形成に関わる全ての変数に正の影響を与えていた。この結果は、本来感が欠乏している状態、すなわち自分自身でいられているとは感じられていない状態を考慮すると解釈できる。自分を感じられていない状態では、自身が何を求めている、何を感じているのかについて混乱しているであろうと考えられる。そのような混乱した状況では安心して自分を信じた自己決定は難しいであろうし、自己の新しい可能性を追求しようとの気持ちも起こりにくいと考えられる。さらに、そうした状況では自分の欠点や短所に圧倒され、的確な問題意識に基づいた改善意識も生まれにくいと考えられる。Kernis(2003b)は、本来感を高く感じている個人の特征として、経験に開かれていることや、失敗経験を歪めずに処理できること、自己の感情に気づく能力があることなどを指摘しており、本研究の結果はこれらを支持するものと言えよう。このように、自分らしくある感覚は自分の責任により選択していくこと、自己の新しい可能性へと踏み出そうとする意識、そして現状の自分を改善させていこうとする意識にとって重要な内的資源であることが示唆された。

さらに、自己価値の随伴性は、自律性に負の影響を与える一方で、現状改善意識に正の影響を与えていた。自己価値が何らかの外的基準に随伴しているならば、



$$\chi^2(6) = 8.077, p = .232, \chi^2/df = 1.346, GFI = .988, AGFI = .957, CFI = .993, RMSEA = .040$$

a) **: $p < .01$, *: $p < .05$

b) 基準変数の右上に示されている値は基準変数に対する説明変数の説明率である。

FIGURE 1 本来感・自己価値の随伴性・自尊感情が主体的な自己形成に与える影響^{a) b)}

その基準上での達成・成功を求めるため、随伴している対象へのコミットメントをもたらすと考えられる。このように考えると、現状での自己の欠点が随伴している基準上での欠点であれば、それを改善しようと現状改善意識が高まることは妥当な結果であると考えられる。随伴していることは、それが自己ではない何ものかによる他律的なものである点で、確かに自律性の感覚を低下させるものの、随伴対象内においては自己をより良くしていこうとする意識につながる能動的な面も備えていることが示唆される。このように考えると、自己価値の随伴性とは、自己決定理論(Ryan & Deci, 2000)における取り入れ的な調整スタイルにおいて際立つ特徴なのかもしれない。外的な基準で自己価値感覚が変動するためには、外的基準を自己に内在化していなければならない。そのような、外的基準を深く内在化させている取り入れ的な調整スタイルにある発達状態は、親や社会から実質的な罰が与えられることでのみ行動が制御されるような、完全に他律的な発達状態(自己決定理論で言うところの外的調整スタイル)ではなく、いくらかは社会化が進んだ状態であると考えられる。他者のまなざしを獲得していることは社会的存在である人間の適応にとって重要である(梶田, 1998)。それゆえ、確かに青年期以降の人間においては自己価値の随伴性は不適応的な側面が特徴的となる(Kernis, 2003a; Patrick et al., 2004)であろうが、それ以前の発達段階も含めて考えるとその適応的意義(Arndt & Schimel, 2003)も認めざるを得ないように思われる。

自尊感情は自律性に対して有意な影響を与えてはいなかった。伊藤・小玉(2005)では、自尊感情が自律性に対して負の影響を与えていたが、この結果と本研究の結果は、部分的には一致し、部分的には一致しない結果である。一致している点は、自尊感情と自律性との正の相関関係が、自尊感情と共変動している本来感の影響によるものであることが再度示唆されたことである。本研究においても、自尊感情と自律性の正の単相関関係が見られた(TABLE 2)が、本来感を統制した場合にはその影響が消失しており(FIGURE 1)、これにより自尊感情と自律性との関係は、本来感の影響を受けたものであることが示唆される⁷。一方、伊藤・小玉(2005)の結果と一致しない点は、自尊感情が自律性に対して負の影響を与えてはいなかったということである。この不一致がどのような要因によるのかについては本研究の結果からでは判断しがたい点であり、今後の更なる検討が必要とされる。

また、自尊感情は可能性追求意識と現状改善意識に

対しても有意な影響を与えていなかった⁸。Kernis (2003b) や Baumeister et al. (2003) が自尊感情の適応的な意味合いについて指摘するように、単なる自尊感情の高低が自己形成に結びつくわけではないのだと考えられる。自分に自信を持っていることは、そうした自信から新しい自分を探すような自己形成につながる面があると考えられる。しかしながら、自己嫌悪感の高さゆえに自分をよりよいものへと形成していこうとする意識が高まる場合(水間, 2003)や、自分に満足することでそれ以上の可能性を求めず、失敗から学ぶ姿勢がなくなる場合(Crocker & Neure, 2003; Crocker & Park, 2004)なども考えられる。多様な側面を持つがゆえに、全般的な自尊感情は直接的には明確に可能性追求意識と現状改善意識には影響しないのであると考えられる。

全般的議論と今後の課題

最後に本研究の意義や問題点と共に、本研究が示唆する今後の課題を指摘しておく。

本来感と自己価値の随伴性という構成概念を考慮することにより、これまで曖昧で全般的なものとして扱われてきた自尊感情(Baumeister et al., 2003; Kernis, 2003b)を、より精緻化して理解することに一定の貢献を与えたという点に本研究の意義がある。それは、主体的な自己形成という成人化期の成長において自尊感情は直線的な影響を与えておらず、主体的な自己形成を理解するには自分らしくあると感じられることや、自己価値が外的基準に随伴することに注目する必要があるということである。

⁷ FIGURE 1の最終モデルでは、説明変数として自己価値の随伴性も含まれており、自尊感情と自律性との間にある正の相関関係は、本来感ではなく自己価値の随伴性の影響によるものであるとも考えられる。これを明らかにするため、自律性のみを基準変数として、自尊感情のみを説明変数にしたモデル、自尊感情と本来感を説明変数としたモデル、そして、自尊感情と自己価値の随伴性を説明変数としたモデルを検討した。その結果、第1のモデルでは自尊感情の回帰係数が有意であり、第2のモデルにおいては自尊感情の偏回帰係数が有意とはならず、第3のモデルにおいては自尊感情の偏回帰係数は有意な正の影響を与えていた。このことから、自尊感情と自律性との正の関係性は本来感の影響を受けたものであり、自己価値の随伴性によるものではないことが確認された。

⁸ なお、検定統計量の小さいパスから1本ずつパスを削除する方法で、5%水準で有意なパスのみが残るようにしてモデルを確定したところ、FIGURE 1でみられたパスに加えて、自尊感情から可能性追求意識に対して標準偏回帰係数.17 ($p < .05$)で正の影響が見られ、可能性追求意識についての決定係数は.10であった。ここから、可能性追求意識に対する自尊感情への影響については、検討の余地の残る結果となっている。

ただし、本研究には以下のような限界もある。まず、本研究は個人内過程を検討したのではなく、同時点での質問紙への回答により因果を論じている点に限界がある。また、本研究で示された影響（決定係数）は、主体的な自己形成を十分に説明するには遙かに及ばない程度のものであり、とりわけ自己形成意識については他の様々な要因にも目を向けていく必要があると考えられる。例えば、当人の意識に昇らない経験（山田, 2003）や、当人が意図しない環境的な要因（Bauer & McAdams, 2004；星野, 1975）によっても、結果として自己形成が進むことが考えられる。今後、人間が自身の力でその人らしくなっていく過程の全体を明らかにするには、さらに幅広い側面に配慮した検討が課題となるだろう。

最後に、自己価値の随伴性について今後の研究の方向性を示唆しておきたい。本研究では、自尊感情が外的な基準に随伴しているか否かの一次元的な個人間差を問題とする立場（Deci & Ryan, 1995；Kernis, 2003b）に依って自己価値の随伴性を上げた。しかし、これとは異なる立場がある。それは、自尊感情が随伴する領域を細かく区別する立場（Crocker & Wolf, 2001）や、随伴性（contingency）としてではなく、自尊感情を支える源（source）や土台（base）としてそれらの領域の豊かさを問題とする立場（e.g. Hayes, Harris, & Carver, 2004）である。項目を見ても明らかなように、本研究で用いた自己価値の随伴性尺度は、自尊感情が随伴している対象として外見的な魅力、他者の目・評価、課題達成の有能さが含まれており、これらを総合して外的な随伴性と捉えている（Patrick et al., 2004）。しかし、これら以外にも、自身の内的な属性や信念に自尊感情が随伴している場合もあると考えられ（Arndt & Schimel, 2003；Crocker & Wolf, 2001）、より広く、より精緻化して随伴対象を検討することもまた意義あるものと思われる。この点についての検討は、日本ではほとんど行われていない課題と言える。

引用文献

- Arndt, J., & Schimel, J. 2003 Will the real self-esteem please stand up? Toward an optimal understanding of the nature, functions, sources of self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 27-31.
- Arnett, J. J. 2000 Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, 55, 469-480.
- Bauer, J. J., & McAdams, D. P. 2004 Personal growth in adults' stories of life transitions. *Journal of Personality*, 72, 576-602.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. 2003 Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- Baumeister, R. F., Heatherton, T. F., & Tice, D. M. 1993 When ego threats lead to self-regulation failure: Negative consequences of high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 141-156.
- Cigman, R. 2004 Situated self-esteem. *Journal of Philosophy of Education*, 38, 91-105.
- Crocker, J., & Nuer, N. 2003 The insatiable quest for self-worth. *Psychological Inquiry*, 14, 31-34.
- Crocker, J., & Park, L. E. 2004 The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, 130, 392-414.
- Crocker, J., & Wolfe, C. T. 2001 Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, 108, 593-623.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1995 Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum. Pp.31-46.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 福島脩美 1975 自己評価の活用—自己実現を目指して— 児童心理, 29, 453-458.
- Harter, S. 2002 Authenticity. In C. R. Snyder & L. J. Shane (Eds.), *Handbook of positive psychology*. London: Oxford University Press. Pp. 366-381.
- 林知己夫・鈴木達三 1986 社会調査と数量化—国際比較におけるデータ解析— 岩波書店
- Hayes, A. M., Harris, M. S., & Carver, C. S. 2004 Predictors of self-esteem variability. *Cognitive Therapy and Research*, 28, 369-385.
- Hodgins, H. S., & Kee, C. R. 2002 The integrating self and conscious experience. In E. L. Deci, & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press. Pp.97-100.

- 星野 命 1975 自己の成長・発展と転機 児童心理, 29, 295-303.
- 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85. (Ito, M., & Kodama, M. 2005 Sense of authenticity, self-esteem, and subjective and psychological well-being. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 53, 74-85.)
- ジェームス, W. 今田 寛(訳) 1992 心理学(上) 岩波書店 (James, W. 1892 *Psychology, briefer course*. London: Macmillan)
- 梶田叡一 1984 自己概念と教育-1- 児童心理, 38, 836-851.
- 梶田叡一 1994 自尊心 梶田叡一(編) 自己意識心理学への招待 有斐閣ブックス p.146.
- 梶田叡一 1998 意識としての自己: 自己意識研究序説 金子書房
- 川畑徹朗・高石昌弘・西岡伸紀・石川哲也・JKYB 研究会(監訳) 1997 WHO・ライフスキル教育プログラム 大修館書店 (World Health Organization 1994 Life skills education in schools.)
- Kernis, M. H. 2003 a Optimal self-esteem and authenticity: Separating fantasy from reality. *Psychological Inquiry*, 14, 83-89.
- Kernis, M. H. 2003 b Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- 小平英志 2002 自己不一致の種類と自己形成の方向性との関連 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 714-715.
- 黒崎英樹 1995 青年期後期における自己形成態度と自己決定態度の研究 甲南大学紀要文学編, 98, 133-147.
- Mecca, A. M., Smelser, N. J., & Vasconcellos, J. (Eds.) 1989 *The social importance of self-esteem*. Berkeley, CA: University of California Press.
- 溝上慎一 1998 自己の基礎理論 金子書房
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究, 46, 131-141. (Mizuma, R. 1998 A study of relationship between an ideal self and self-esteem, and consciousness to self-formation. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 46, 131-141.)
- 水間玲子 2002 自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題—個人の主体性の問題— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 429-441.
- 水間玲子 2003 自己嫌悪感と自己形成の関係について—自己嫌悪感場面で喚起される自己変容の志向に注目して— 教育心理学研究, 51, 43-53. (Mizuma, R. 2003 Feelings of self-disgust and self-development: The intention to change the negative self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 51, 43-53.)
- 村田徹也 2002 90年代の教育と青年の自己形成 愛知大学文学論叢, 125, 17-49.
- Neighbors, C., Larimer, M. E., Geisner, I. M., & Knee, C. R. 2004 Feeling controlled and drinking motives among college students: Contingent self-esteem as a mediator. *Self and Identity*, 3, 207-224.
- 西田裕紀子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443. (Nishida, Y. 2000 Diverse life-styles and psychological well-being in adult women. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 48, 433-443.)
- 小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44. (Oshio, A. 2001 Narcissistic personality, instability of self-image, and level of self-esteem and its stability. *Japanese Journal of Personality*, 10, 35-44.)
- Paradise, A., & Kernis, M. H. 1999 [Development of the contingent self-esteem scale] Unpublished data, University of Georgia, Athens.
- Patrick, H., Neighbors, C., & Knee, C. R. 2004 Appearance-related social comparisons: The role of contingent self-esteem and self-perceptions of attractiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 501-514.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. 2000 Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. 2004 Avoiding death

- or engaging life as accounts of meaning and culture : Comment on Pyszczynski et al. (2004). *Psychological Bulletin*, **130**, 437-477.
- Ryff, C. D. 1989 Happiness is everything, or is it? : Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.
- Sheldon, K. M., Kasser, T., Smith, K., & Share, T. 2002 Personal goals and psychological growth : Testing an intervention to enhance goal attainment and personality integration. *Journal of Personality*, **70**, 5-31.
- 滝沢三千代 1994 思春期・青年期の発達心理 伊藤隆二・橋口英俊・春日 喬 (編) 思春期・青年期の臨床心理学 駿河台出版社 Pp.1-38.
- 田中麻里 1995 現代青年の意識と行動一価値意識と自己形成に関わって一 東京家政大学研究紀要, **35**, 99-105.
- 外山美樹・桜井茂男 1999 自己意識尺度の因子構造の再検討 筑波大学心理学研究, **21**, 141-147. (Toyama, M., & Sakurai, S. 1999 Testing the dimensionality of the Self-Consciousness Scale. *Tsukuba Psychological Research*, **21**, 141-147.)
- 山田剛史 2003 青年期の自己形成に関する研究の概観と展望一現象 (リアリティ) 理解のためのトライアングレーション一 人間科学研究, **11**, 165-177. (Yamada, T. 2003 The review of perspective tasks on the self-development in adolescence : The triangulation for understanding reality. *Human Sciences Research*, **11**, 165-177.)
- 山田剛史 2004 理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究, **12**, 59-72. (Yamada, T. 2004 Self-development of college students in terms of ideal self. *Japanese Journal of Personality*, **12**, 59-72.)
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. 1982 The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)

謝 辞

貴重な授業時間中に、質問紙への回答をしていただきました学生みなさま、そして、調査の機会を与えて下さった先生方に感謝申し上げます。また、研究の進行に際して貴重なご意見をいただきました、筑波大学人間総合科学研究科の松井豊先生に深く感謝いたします。そして、尺度の翻訳に多大なる労力と時間を割いていただきました、筑波大学人間総合科学研究科の堀越勝先生に心からの感謝の気持ちを申し上げます。In addition, we give our deepest thanks to Dr. M. H. Kernis for granting us permission to translate the Contingent Self-Esteem Scale, as well as for his cooperation in the translation.

(2005.1.14 受稿, 10.3 受理)

Self-Feelings That Support Intentional Self-Development in University Students : Sense of Authenticity and Global and Contingent Self-Esteem

MASAYA ITO (DOCTORAL PROGRAM IN COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND MASAHIRO KODAMA (INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2006, 54, 222—232

The purpose of the present study was to examine the effect of sense of authenticity, global self-esteem, and contingent self-esteem on intentional self-development (autonomy, self-cultivating motivation, and self-improvement motivation). University students ($N=220$) answered a questionnaire. Using back-translation, a Japanese version of the Contingent Self-Esteem Scale was developed. The results of a scale analysis on the Contingent Self-Esteem Scale indicated that its reliability and validity were satisfactory. The results of a multivariate multiple regression analysis were as follows: sense of authenticity increased all kinds of intentional self-development; contingent self-esteem decreased autonomy and increased self-improvement motivation, whereas global self-esteem had no effect on intentional self-development. These results suggest the importance of a conceptualization regarding self-esteem that takes into account sense of authenticity and contingent self-esteem.

Key Words : intentional self-development, sense of authenticity, contingency of self-worth, contingent self-esteem, university students